

聖書：Ⅱサムエル 3：1～39

説教題：主が報いてくださる

日時：2018年1月14日（夕拝）

前回は3章1節までを読みましたが、3章1節は2章を理解する上でも、また3章を理解する上でもカギになる御言葉だと思われます。3章1節：「サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続いた。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」ダビデの命を狙ったイスラエルの初代王サウルはサムエル記第一最終章で死に、後はダビデが王座に着座するだけかと思われましたが、何とサウルの子アブネルがサウルの子の生き残りイシュ・ボシェテを王として立てたため、二つの家には長い戦いが続くことになりました。その結果、ダビデがイスラエル全体の王となるには、なお7年6ヶ月も待たされることとなります。彼がその王座に着くのは5章においてです。それまでの間にどんなことがあったのかが、今日の3章と次の4章に記されます。

まずこの章の2～5節はヘブロンで生まれたダビデの子どもたちの名前です。最初のアヒノアムと次に出て来るアビガイルは、すでにダビデの妻としてサムエル記第一に出て来ました。その二人に加えて、マアカ、ハギテ、アビタル、エグラという奥さんを持ったこと、そしてそれぞれに子どもが生まれたことが書かれています。ある人はこのリストを見て戸惑うかもしれません。こんなに奥さんを持つなんてダビデは一体何を考えているのか。聖書はこのような重婚を認めているのかと。しかしそれは時代錯誤的な問いだと思います。古代世界では病気にかかれば死亡率が高く、家系保存のために、特に地位の高い人たちの間にこのような習慣が見られました。もちろん聖書はこれを良しとしているわけではありません。重婚の結果、どんな悲劇が起こるかを記すことによってそのことを示しています。しかし私たちはまずその時代の状況において読まなければなりません。神はその人の今あるところから導かれます。私たちはダビデの時代より何世紀も後に生きている者たちであって、神の啓示に関してより多くの恩恵を受けています。神の啓示には歴史的進展性が見られるのであって、すべての時代を同一レベルで論じることはできません。むしろ多く知っている人は多く求められること、多く恵みをいただいている人はそれにふさわしく歩まなければならないという聖書の原則に照らして、自分自身が知っている真理に応じて生きることに注意すれば良いのです。この2～5節は当時の状況においてダビデの家が益々強くなって行ったことの例証として記されています。

では一方のサウルの家はどうだったのでしょうか。6 節以降を見るとイシュ・ボシェテを王として立てたアブネル自身が、何とダビデの側に付くことを申し出ます。一体彼の思惑は何だったのでしょうか。この3章は特にアブネルとヨアブとダビデの3人を巡って展開します。その3人に一人ずつ注目する形で見て行きたいと思います。

まず最初はサウルの大將軍アブネルについてです。6 節にアブネルは「サウルの家で勢力を増し加えていた」とあります。彼はサウルが生きていた時も、サウルに次ぐNo.2の存在でしたが、サウル死後は彼が実権を握っていました。そんなアブネルについて彼がサウルのそばめと通じたという情報がイシュ・ボシェテの耳に届きます。王の亡き後、王のそばめをめとることは王位継承権を主張する行為です。その真偽を確かめようとすると、アブネルは激しく怒ります。そして8~10 節で「今までおまえを守ってやったオレ様をおまえが咎めるなら、オレはダビデの側につく！」と言い放ちます。彼はさっそく行動を開始し、ダビデと交渉します。そしてその後、イスラエルの長老たちと話をし、ダビデを王とするための契約を結ぶ準備をし、さらに 19 節ではサウル出身部族であるベニヤミン人とも話し合い、彼らの合意も取り付けます。さすがのすご腕アブネルです。

このアブネルの行動を見て印象的なことは信仰的な言葉が次々に彼の口から発されていることではないでしょうか。10 節を見ると「サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てる」という主の言葉を持ち出して、この通りのことを私が果たせなかったなら、「神がこのアブネルを幾重にも罰されますように」と言っています。18 節でも、「主がダビデについて『わたしのしもべダビデの手によって、わたしはわたしの民イスラエルをペリシテ人の手、およびすべての敵の手から救う』と仰せられている」という主の言葉を取り上げています。アブネルは突然信仰的な人間に変わったのでしょうか。これらの主の言葉を知っていたのなら、なぜもっと前からそうしなかったのでしょうか。しかしその答えは彼が主への信仰心によってこのように行動したわけではないということでしょう。彼が今回このように振る舞ったのはイシュ・ボシェテに悪事を咎められたことに怒って反発したからです。また多くの注釈者が言うのは、アブネルはもはやイシュ・ボシェテと組んでいては埒が明かないと判断したのだらうということ。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなりつつあります。それならダビデの側に回って今後のために

重要なポストを得た方が良い。イシュ・ボシエテを王に立てたのは他ならぬこのアブネルでしたが、彼と一緒にでは出世できないと判断するや否や、簡単にその王を見捨てて、敵に寝返ることも厭わない。そうして将来の祝福を人間的な仕方では確かなものにしようとした。彼は野心家です。このような生き方は本当の祝福に至るのでしょうか。それは続く記事が明らかにするところです。

二人目として注目したいのはダビデの将軍ヨアブです。彼はダビデとアブネルの交渉の場には居合わせませんでした。そして帰って来てからそのことを知り、ダビデに憤って言います。24～25 節：「それでヨアブは王のところに来て言った。『何ということななされたのですか。ちょうどアブネルがあなたのところに来たのに、なぜ、彼を送り出して、出ていくままにしたのですか。ネルの子アブネルが、あなたを惑わし、あなたの動静を探り、あなたのなさを残らず知るために来たのに、お気づきにならなかったのですか。』」そして彼はダビデに内緒でアブネルを連れ戻し、彼に話すと思せかけて、その下腹を突いて死なせます。すなわち暗殺です。なぜヨアブはこのような行動に出たのでしょうか。一つには 30 節に記されているように兄弟アサエルがアブネルに殺されたからでした。その恨みをはらしたのです。そして注解者たちがさらに指摘するのは、ヨアブをこのように駆り立てたもう一つの思いはアブネルに対する競争心だろうということです。ヨアブは今、ダビデの軍団長として働いていますが、アブネルがこちらに加わったら自分のライバルが誕生してしまいます！そこで保身のため、己の権力保持のために、アブネルを早くに除き去ろうとした。果たしてこのような仕方では祝福を手にする生き方に本当の祝福はあるのでしょうか。29 節にはダビデによる厳しい呪いの言葉があります。「それは、ヨアブの頭と彼の父の全家にふりかかるように。またヨアブの家に、漏出を病む者、ツアラアトに冒された者、糸巻きをつかむ者、剣で倒れる者、食に飢える者が絶えないように。」また 39 節には「主が、悪を行う者には、その悪にしたがって報いてくださるように。」とも言われています。このダビデの祈りはやがて成就します。そのような結末をヨアブはやがて刈り取るということを私たちは十分に良く考えなければなりません。

以上の二人と対照的なのが 3 人目のダビデであると言えます。まずアブネルに対する彼の態度を見たいと思います。アブネルはダビデにとって脅威的な存在だったと思われます。サウルが生きている時代もサウルの右腕的存在でしたが、サウルが死んだ後もおとなしくするどころか、対抗勢力を立てて挑戦して来た張本人です。しかしダビデはア

ブネルが和平交渉を申し出て来た時、それを受け入れました。そして彼が暗殺された時、心から悼み悲しみました。本来ならこのことで安堵し、祝宴を開いたとしてもおかしくなかったのに、ダビデはアブネルを丁重にヘブロンに葬り、サウルの時と同じように哀歌を作ります。そして民がダビデに食事を取らせようとしても、それを拒み、断食しました。この結果、ダビデは一層、人々の心を勝ち取ることになったのです。このアブネルの死は 37 節に暗示されているように、実際はダビデの指令に基づく暗殺だったのではないか、それによってサウル家の一掃を図ったのではないかという疑いが持たれる可能性があります。ダビデはそれを払拭するためにも自分の態度を明らかにする必要があります。しかしもちろん彼は人々の目を気にして心にもないパフォーマンスをしたわけではないでしょう。これまでのダビデの姿を見て来たなら、彼は心からアブネルの死を悲しんだと見るのが自然です。そしてその心の外的な現れとして、彼はこのような行動を取り、人々に理解されたのです。ダビデがこうして、これまで対抗したアブネルの死さえも悲しんだのは、彼が人間的な方法で祝福を手に入れようとはしていなかったことの現れであると言えます。彼は神が良しとされる最も良い時に、最も良い方法で神が約束を果たしてくださると信じていたので、敵の死さえも純粹に悲しむことができたのです。

またダビデのこの姿勢はヨアブに対する態度にも現われています。ヨアブの行動の結果、脅威的な人物がいなくなったのですから、ダビデとしてはヨアブをそんなに咎めないというのが普通の人間の考えかもしれません。ところが 29 節の彼の言葉は厳しいものです。これはいかにダビデがヨアブのしたことに怒りを覚えているかの現われです。ダビデは以前もサウルに手を下すチャンスが繰り返しありましたが、退けて来ました。部下が「今がその時です！主の御心です！」とせき立てた時も、ダビデはそれは誘惑であり、罪の道だと言って退けて来ました。そのように自分が注意深く避けて来たことをヨアブが平気で行なった。ダビデはそのヨアブに厳しい呪いを語ることによって「これが主の祝福にあずかる方法ではない」と示しているのです。39 節で彼は「主が、この悪に報いてくださるように」と言っています。そして確かに後のソロモンの時代に、1 列王記 2 章において、ヨアブは打たれるのです。

以上のサムエル記第二 3 章。先に述べたように、ダビデはこの後、5 章でイスラエル全体の王となって行きますが、そこに至るまでの間には、今日見たようなドロドロとした人間の画策、企み、陰謀があったのです。アブネルは自分の地位を確保するため、イ

シュ・ボシェテを見捨ててダビデに近づきました。ヨアブもまた自分の地位を確保するため、アブネルを呼び出し、暗殺しました。私たちも時に彼らのようであるかもしれません。人間的な知恵と力に頼り、人間的な方法で誰かと張り合い、自分にとって邪魔と思う人を排除し、色々な手を使って窮地に追いやり、そうして自分が望む状態、自分にとって祝福と思われる世界を作ろうとするかもしれません。しかし今日の章が教えているのは、そういうアブネルの道、またヨアブの道にも祝福はないということです。真の祝福は、神に信頼して正しい道を進んだダビデにこそ与えられて行く。彼はこの時、自分はまだ力が足りない、自分は弱いと言いました。すなわち彼の目の前にいる他の人たちのほうが強い。彼らの方が影響力のある人たちであり、とても私では太刀打ちできない。では弱いダビデには望みがないのか。いいえ。ダビデは「主が報いてくださる」と言いました。力ある人々が色々動いている中で、それでも主権を持っているのは「主」だとダビデは仰いでいました。この主権者に対する信頼こそ、あらゆる困難の中でのダビデの慰めだったのです。また彼の忍耐の歩みの秘訣だったのです。また彼の望みの秘訣だったのです。もしこのような主がおられてすべてを支配しておられるなら、自分にとって厄介な人がいても、自分で手を下したり、何か操作する必要は一切ない。その人を罠に陥れたり、悪い噂を流しておとしめようと計る必要は一切ない。いや、それは神に信頼する人間として、御前でしてはならないことです。私たちは正しくさばかれる方に一切をお任せし、自分としては主に喜ばれる道こそを進めば良い。そして主が最善の時と方法によって祝福してくださることを待ち望んでいけば良いのです。それがダビデがずっとこれまでのサムエル記の中で示して来た姿です。

私たちの生活にも今日の箇所のような混乱があるかもしれません。私たちの前にも何かにつけ、私にとって妨げとなり、好ましくない活発な動きをする人がいるかもしれません。しかも人間的に見て、その人は力強い。しかし私たちが思うべきは、いくらその人に知恵があり、力があり、才能があっても、主によらなければ、その人のすることは成功しないということ。アブネルやヨアブが結局どうなったかを見て下さい。彼らは恐れるに足りないのです。真の祝福は主により頼む人に与えられるのです。私たちは心騒がせず、自分の心を主に信頼することにおいて統一あるものにしたいと思います。人のほかりごとは失敗します。主こそ真に力ある方であり、主の御心こそがなります。この主権者を見上げて心を強くし、人間的な手を使って祝福をつかみ取る生き方ではなく、その時と方法を主にお任せし、ただ主に喜ばれる道にのみ信頼をもって歩んで行くこと。そこに与えられる祝福にダビデのようにあずかる者へと導かれて行きたいと思います。